

児童の援助行動に注目した鬼遊びの 体育授業における実践

上野 耕平・山神 眞一・石川 雄一・野崎 武司*
(保健体育) (保健体育) (保健体育) (高度教職実践専攻)
宮本 賢作・米村 耕平・前場 裕平**・大西 美輪**
(保健体育) (保健体育) (附属高松小学校) (附属高松小学校)
山路 晃代***・山本 健太***・増田 一仁****・倉山 佳子****
(附属坂出小学校) (附属坂出小学校) (附属高松中学校) (附属高松中学校)
三宅 健司*****・石川 敦子*****・山西 達也*****
(附属坂出中学校) (附属坂出中学校) (香川県教育委員会)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部
*760-8522 高松市幸町1-1 香川大学大学院教育学研究科
**760-0017 高松市番町5-1-55 香川大学教育学部附属高松小学校
***762-0031 坂出市文京町2-4-2 香川大学教育学部附属坂出小学校
****761-8082 高松市鹿角町394 香川大学教育学部附属高松中学校
*****762-0037 坂出市青葉町1-7 香川大学教育学部附属坂出中学校
*****760-8582 高松市天神町6-1 香川県教育委員会事務局

Practical Study on a Game of Tag Focusing on Helping Behavior of Children in Physical Education

Kohei Ueno, Shinichi Yamagami, Yuichi Ishikawa, Takeshi Nozaki*,
Kensaku Miyamoto, Kohei Yonemura, Yuhei Maeba**, Miwa Onishi**,
Akiyo Yamaji***, Kenta Yamamoto***, Kazuhito Masuda****, Yoshiko Kurayama****,
Kenji Miyake*****, Atsuko Ishikawa***** and Tatsuya Yamanishi*****

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Graduate School of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522*

***Takamatsu Elementary School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 5-1-55 Ban-cho, Takamatsu 760-0017*

****Sakaide Elementary School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 2-4-2 Bunkyo-cho, Sakaide 762-0031*

*****Takamatsu Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 394 Kanotsuno-cho, Takamatsu 761-8082*

******Sakaide Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 1-7 Aoba-cho, Sakaide 762-0037*

******Kagawa Prefectural Board of Education, 6-1 Tenjin-cho, Takamatsu 760-8582*

要 旨 本研究では児童の援助行動に注目した鬼遊び(なかま鬼)の体育授業における実践方法及び、その効果について検討を行った。研究1の結果、体育授業におけるなかま鬼の実践方法及び、効果の実証に向けた調査方法に関する情報が得られた。研究2の結果、援助行動が促進されるなかま鬼への参加を通じて、児童の援助自己効力感が高まるほか、クラスにおける居心地の良さの感覚についても向上する可能性が窺われた。

キーワード 体ほぐし 鬼遊び 体育 援助行動 向社会的行動

問題の所在

現代社会が体育に期待する事柄の一つとして、身体活動を通じて獲得したフェアプレイの日常生活への般化が挙げられる。例えば「ルールを守る」、「全力を出し切る」などの行動や「正々堂々と戦う」、「相手を思いやる」などの態度が日常生活にも反映されることが期待されていると言える。そして近年、学級崩壊やいじめ、引きこもりなどが社会問題となるなか、こうした社会的な態度の育成や道徳性の涵養といった役割が、これまでも増して学校体育に求められている（友添，2005）。

このような状況に鑑み、上野（2017a）はフェアプレイとして援助行動に注目し、援助行動が頻繁に行われる鬼遊び（なかま鬼）を開発・実践した上で、鬼遊びに参加した小学2・3年生を対象として行った調査の結果、鬼遊びへの参加を通じて、学校生活場面において先生や仲間を助けることができるという予期を高められる可能性が認められたと報告している。

援助行動は心理学において向社会的行動の一つであるとされる。その定義は研究者によって少しずつ異なるものの、自発的に行われ、かつ他者に利益を与えるという特徴がほぼ共通して認められる（永井，2011）。近年、援助行動に関しては心理学以外からもその重要性が指摘されている。例えば山極（2015）は長年にわたる霊長類研究に基づき、家族やコミュニティが果たす役割が変化するなかで、個人の能力を高めるだけでなく、仲間が互いに補い合い他者と協力して目標に向かうことが社会の維持や幸福に繋がるとしている。他者の置かれた状況への共感や援助行動は個人主義が進む現代社会においてこそ重要であり、学校現場において助長されるべき行動であると考えられる。

先述した上野（2017a）による研究は放課後に行われる学童保育活動において実施されたものであり、そのまま学校体育に応用できるものではない。一方で、研究に認められる三つの特徴から、援助行動を促進する鬼遊びを学校体育で実施することには下記の意義が認められる。

まず一つは、「鬼遊び」が児童期の身体的発達の促進に有効な運動遊びである点である。鬼遊びは我が国だけでなく多くの国で広く行われている運動遊びであり、子どもにとって非常に身近な遊びである。そして鬼遊びには参加者の敏捷性の発達を促進する動きが含まれており、生涯にわたってスポーツに親しむ上で必要とされる基礎的能力を培うのであれば、鬼遊びは特に児童期に実施されるべき運動遊びである（石塚，2006）。従って、援助行動を促進する鬼遊びは、どこの国でも実施可能であり、児童期の心理社会的・身体的発達を促進する教材として有効な運動遊びであると言える。

次に、鬼遊び自体に含まれる社会的な態度に注目している点である。梅垣・友添（2010）は、体育における道徳学習や責任学習の先行研究をレビューし、今後の研究に求められる内容として、運動やスポーツで用いられる技術そのものに含まれている、道徳性や社会性を高める要素に注目した研究を挙げている。そしてその具体例として、柔道において相手が受け身を取りやすいよう行われる投げ技後の引き手を紹介し、こうした運動やスポーツに特有な要素を利用した教授方法を開発することが、教科としての体育の存在意義を高めることに繋がると述べている。従って、鬼遊び自体に含まれる社会的な態度と言える援助行動に注目した体育授業を展開することは、体育の存在意義を高めることにつながると考えられる。

最後に、援助行動を促進する鬼遊びが体ほぐしの運動の教材として利用できる点である。体ほぐしの運動は全学年を対象に「体への気づき」、「体の調整」、「仲間との交流」を主眼として実施され、運動の得意不得意を越えて、仲間と運動を楽しんだり、協力して運動課題を達成することを目的としている（文部科学省，2015）。大津ら（2010）は、学級崩壊やいじめなどの問題を前にして、児童の心の問題に対する体育の役割が再認識された結果、「仲間との交流」などを主眼とする体ほぐしの運動にその役割が期待されるようになったとしている。江村・大久保（2012）は児童の学級適応感

に対してクラスの友人との関係が少なからず影響を及ぼすことを明らかにしており、援助行動を通じて仲間との交流を促進する鬼遊びは児童の学級適応感を高めると予想され、体ほぐしの運動に期待されている役割を果たすと考えられる。

以上のように、援助行動を促進する鬼遊びを体育授業場面で実践することは、1) 低下が懸念されている児童の運動能力・体力の向上を促進する、2) 多くの国で「非生産的で子どもの生涯にわたって重要な意義を持たない」(友添・梅垣, 2007)と批判される体育の存在意義を示す、3) 身体活動を通じて仲間との交流促進を図る体ほぐしの運動として具体例を示すなどの意義を持つと考えられる。一方で、これまで学校体育においてなかま鬼を実践した研究はなく、援助行動を促進する鬼遊びへの参加が児童の援助行動の他、学校生活に及ぼす影響については明らかにされていない。

そこで本研究では、小学生を対象として実践研究を行い、1) なかま鬼の小学校体育授業での実施方法について検討すると共に、2) なかま鬼が児童の援助自己効力感やクラスにおける居心地の良さに及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。

研究1

目的

研究1では「体育授業における鬼遊び」の実践を通じて、その実施方法及び援助自己効力感に及ぼす効果について試行的に検討する。

方法

調査対象者 香川大学教育学部附属坂出小学校3年生2クラスの児童の内、研究1における2回の実践に参加した上で、実践前後に行われた調査に回答した63名(男子26名、女子37名)を調査対象者とした。

手続き 調査対象者は2つのクラスごとに、「なかま鬼」及び「しっぽ取り」の2種類の鬼遊びにそれぞれ参加した。その上で授業の参加前後に、上野(2016)が作成している児童用援

助自己効力感尺度への回答を求められた。尺度への回答は、「1. できないと思う」から「4. できると思う」までの4件法で行い、分析には全項目に対する回答の平均値を用いた。またなかま鬼後にのみ、鬼遊び参加中の援助及び被援助行動の頻度を確認する目的で、1) 仲間を助けるために動くことができた頻度と、2) 自分を助けるために仲間が動いてくれた頻度について回答を求めた。質問への回答は「1. ぜんぜんできなかった(してくれなかった)」から「4. よくできた(してくれた)」までの4件法で行い、分析には回答の値をそのまま用いた。鬼遊びの実施に際しては、順序効果を相殺すると共に、効果の保持について確認できるように、両クラスにて実施順序を逆にした。また本研究では鬼遊び参加前後における回答を児童ごとに対応させる必要があることから、調査は記名式で行われ、授業前後に授業担当教諭が調査用紙を児童に直接配布した上で実施し、その場で回収する方法により行われた。

なお調査とは別に、本研究と同時期に3年生児童を対象として実施された体力テストの内、児童の敏捷性を測定する「反復横とび」に関するデータの提供を受けた。

しっぽ取り 小学校の体育館4分の1程度の広さの四角形の枠内で、6人もしくは7人を1つのグループとして行われた。児童は1人の鬼とそれ以外の逃げ手の役を交代しながら務めた。逃げ手はしっぽ取り用に市販されているしっぽを腰の部分に装着した。開始の合図の後、逃げ手の児童は鬼にできるだけしっぽを取られないよう枠内を逃げ回った。しっぽを取られた児童は枠外に出ることとした。

なかま鬼 しっぽ取りと同じ広さ、グループで行われた。なかま鬼では6人もしくは7人の児童が1人の鬼と逃げ手5人の役を交代しながら務めた。逃げ手の児童は鬼にタッチされないよう枠内を逃げ回るが、逃げ手の児童同士で手をつないでいる時、鬼はタッチできない。逃げ手の児童は一度に1人の児童としか手をつなぐことはできない。逃げ手が鬼にタッチされた場合は、一端止まった後、鬼の合図で再度追いか

け直した。開始前に「自分だけが助かるのは簡単である一方、鬼に追われている児童を助けようとするに価値がある」ことを、授業担当教諭が説明した上で実施した。

いずれの鬼遊びにおいても、児童は1分程度で鬼役を交代しながら繰り返し鬼遊びを行い、授業時間の途中でしっぽ取りでは逃げ方や追いかけ方について全体で振り返った。なかま鬼ではそれらに加えて助け方についても振り返りを行った。その後再度鬼遊びを続けた後、授業の振り返りを行った。グループによって多少の差異はあるものの、1回の授業において12回程度の鬼遊びが各グループで行われた。なお研究1・2を通じて、鬼遊びは全て「体ほぐしの運動」として、児童間の交流に主眼をおいて実施された。

結果と考察

児童の援助自己効力感に対するなかま鬼の効果

鬼遊びの種類（なかま鬼・しっぽ取り）及び調査時期（実施前・実施後）を独立変数、援助自己効力感を従属変数として、反復測定による分散分析を実施した。その結果、鬼遊びの種類及び調査時期の主効果のほか、両変数の交互作用のいずれも認められなかった（表1）。

表の数値に明らかなように、鬼遊び実施前後において援助自己効力感の変化がほとんど認められなかった。本結果については、鬼遊び実施前に行った調査から得られた値が非常に高かったことが影響したのではないかと考えられる。援助自己効力感尺度の作成段階における小学2年生から4年生までの援助自己効力感の平均値（ $M=2.85$, $SD=.67$ ）との比較では、本研究において得られた値はその値よりも有意に高い値を示していた。尺度の作成段階では無記名で

調査が行われた一方、研究1では記名式である上、調査の実施から回収に至るまでの作業を児童らの評価者である授業担当教諭に依頼していた。そのことが「社会的に望ましい回答」を児童に促したことにより、平均値が高い値になったのではないかと推察された。

なかま鬼における児童の援助及び被援助行動と敏捷性の関係 なかま鬼の実施中に児童が行った援助行動及び被援助行動の頻度と児童の敏捷性との相関係数を算出した結果、両者の間に有意な相関関係は認められなかった（援助行動： $r=.03$, $p=.82$, 被援助行動： $r=-.19$, $p=.14$ ）。

本結果は、敏捷性に優る児童が援助行動を行い、敏捷性に劣る児童が助けられてばかりいるとは限らないことを示している。なかま鬼ではルールの特性上、俊敏に動くことができなくても、予め仲間を助けやすい位置にいたり、その場から少し動くだけで仲間を助けることができる。つまりなかま鬼では、特に敏捷性の高い児童でなくても仲間を助ける経験を重ねることができる。

一般に鬼遊びが児童期における運動あそびとして推奨される理由として、多様な動きの経験と共に敏捷性の発達が挙げられる（石塚, 2006）。それは裏返せば、敏捷性に優ることが鬼遊びでの有能さに繋がることを示している。しかしそれでは、敏捷性に劣り常に捕まえられる対象となる児童は鬼遊びへの参加を避けるようになり、結果的に運動能力も高まらないという負の循環に陥る可能性がある（杉原, 2003）。鬼遊びでは敏捷性に勝ることのみが評価されやすい状況にあるなかで、なかま鬼における援助行動は児童の有能感を高める別の

表1 援助自己効力感に関する分散分析の結果

		鬼遊び前		鬼遊び後		交互作用	主効果	
		Mean	SD	Mean	SD		時期	種類
援助 自己効力感	しっぽ取り	3.32	.60	3.33	.70	.22	.04	1.21
	なかま鬼	3.30	.62	3.28	.68	.00	.00	.01

交互作用・主効果：上段F値，下段 η^2

評価の観点となる可能性がある。従ってなかま鬼は、特に敏捷性に劣る児童の運動参加を促進する役割を果たすのではないかと考えられた。

研究1の結果、なかま鬼への参加が児童の援助自己効力感の向上を導くことを示す結果は得られなかった。しかしその原因として、調査の実施方法に問題がある可能性が認められた。他方、体育授業における鬼遊びの実践方法について情報が得られた。従って本試行となる研究2では研究実施上の問題点について修正を加えた上で、なかま鬼への参加が児童の援助自己効力感に及ぼす影響について再度検討する。

研究2

目的

研究2では、体育授業におけるなかま鬼の実践が児童の援助自己効力感及び、クラスにおける居心地の良さの感覚に及ぼす効果について検討する。

方法

調査対象者 香川大学教育学部附属高松小学校5年生2クラスの児童の内、研究2における2回の実践に参加した上で、実践前後に行われた調査に回答した60名（男子33名、女子27名）を調査対象者とした。

手続き 研究2では研究1と同様の手続きにより鬼遊びを実施したが、それ以外の手続きについては以下のように修正が加えられた。まず、研究2では高学年児童を調査対象とすることから、現職教諭との協議に基づき、援助自己効力感尺度の項目の内「教室でけんかしている子がいたら、先生をよびに行く」について「教室でけんかしている子がいたら何とかして止めよう

とする」に内容を修正した。その上で児童の回答をより細かく検討できるよう、尺度への回答を「1. まったくできないと思う」から「6. 必ずできると思う」までの6件法に変更した。なお尺度の修正に際して実施した尺度の妥当性・信頼性に関する調査の結果、本尺度の妥当性・信頼性を示す十分な値が得られている（上野, 2017b）。

次に研究1では、鬼遊び参加中の援助及び被援助行動の頻度を確認する質問は「なかま鬼」後のみ行ったが、研究2では両鬼遊びへの参加後に実施した。さらに鬼遊びに含まれる援助行動及び被援助行動が児童のクラスにおける「居心地の良さ」を高める可能性が推測されたことから、研究2では江村・大久保（2012）が作成している小学生用学級適応感尺度の下位尺度である「居心地の良さの感覚」を測定する5項目を調査項目に加えた。回答は「1. まったくあてはまらない」から「4. とてもよくあてはまる」までの4件法で行い、分析には各項目への回答の平均値を用いた。

最後に研究2では全ての調査について、授業担当教諭ではなく本研究者もしくは研究協力者となった大学生によって、授業の前後に実施された。

結果と考察

児童の援助自己効力感に対するなかま鬼の効果

鬼遊びの種類（なかま鬼・しっぽ取り）及び調査時期（実施前・実施後）を独立変数、援助自己効力感を従属変数として、反復測定による分散分析を実施した。その結果、両独立変数の交互作用が有意であった（ $F(1,59) = 9.29, p < .01, \eta^2 = .15$, 表2）。そこで単純主効果を確認したところ、なかま鬼実施前後の平均値の差

表2 援助自己効力感に関する分散分析の結果

		鬼遊び前		鬼遊び後		交互作用	主効果		単純主効果	η^2
		Mean	SD	Mean	SD		時期	種類		
援助自己効力感	しっぽ取り	4.19	1.30	4.05	1.46	9.29 **	.43	1.94	なかま鬼前<なかま鬼後	* .05
	なかま鬼	4.10	1.32	4.33	1.30	.15	.01	.04	しっぽ取り後<なかま鬼後	** .07

交互作用・主効果：上段F値，下段 η^2

** $p < .01$, * $p < .05$

が有意であり、実施前よりも実施後の方が高かったほか ($F(1,118) = 6.43, p < .05, \eta^2 = .05$), なかま鬼実施後としば取り実施後の平均値の差が有意であり、しば取り実施後よりもなかま鬼実施後の方が高かった ($F(1,118) = 9.35, p < .01, \eta^2 = .07$)。

さらに、鬼遊び実施中に児童が行った援助行動及び被援助行動の頻度について比較したところ、援助行動及び被援助行動共に、しば取りよりもなかま鬼に参加している間の方が行動の頻度が高いことが明らかになった (援助行動: $t(59) = 6.42, p < .001, d = .79$, 被援助行動: $t(59) = 6.34, p < .001, d = .97$, 表3)。以上の結果から、援助行動がより促されるなかま鬼に参加することにより、児童の援助自己効力感が高まる可能性が窺われた。

しば取りのような一般的な鬼遊びでは「できるだけ長く鬼に捕まらないこと」や「鬼から巧みに逃げること」が技能の卓越を示す。しかしなかま鬼では「自分が捕まるリスクを抱えつつも、できるだけ多くの仲間を助けるために行動すること」が技能の卓越を示す行動となる。また、他の鬼遊びでは敏捷性に優れていることが技能の卓越を強く説明するが、なかま鬼では敏捷性に劣っていたとしても、動き方を工夫することによって仲間を助けることができる。

従ってなかま鬼への参加を通じて、より多くの児童が他者を助ける経験を重ねることができる。

援助行動に関する研究では、過去の援助経験がその後の援助行動を促進することを示す研究が認められる。例えば妹尾 (2001) は、過去に政府機関や各種団体によって実施されたボランティア活動に関する調査結果をまとめた結果、過去にボランティア活動を経験したことのある者は未経験者と比較して、今後のボランティア活動への参加意向が高いことを示し、実際の活動のなかに次の活動を動機づける要因が含まれていると指摘している。また高木・妹尾 (2006) は高齢者大学の受講生677名を対象とした調査の結果、日常生活場面における援助・被援助経験の影響を受けて変容した援助・被援助に対する態度が、次の援助・被援助行動への動機づけに影響を及ぼすことを示している。

こうした先行研究の成果に基づくならば、例えば運動あそびのなかでの経験ではあっても、なかま鬼に参加するなかで援助経験を重ねることにより、児童の援助行動を促進できる可能性があると推測され、今後多方面から検討することにより本メカニズムを解明する必要があると考えられた。

児童の居心地の良さの感覚に対するなかま鬼の効果 鬼遊びの種類 (なかま鬼・しば取り)

表3 援助行動及び被援助行動に関するt検定の結果

	なかま鬼		しば取り		t値	d
	Mean	SD	Mean	SD		
援助行動	2.75	.80	2.03	1.01	6.42 ***	.79
被援助行動	2.75	.82	1.90	.93	6.34 ***	.97

df = 59

*** $p < .001$ (両側検定)

表4 居心地の良さの感覚に関する分散分析の結果

		鬼遊び前		鬼遊び後		交互作用	主効果	
		Mean	SD	Mean	SD		時期	種類
居心地の良さの感覚	しば取り	3.13	.87	3.46	1.01	3.29 †	25.66 ***	1.21
	なかま鬼	3.12	.79	3.61	.89	.03	.75	.02

交互作用・主効果: 上段F値, 下段 η^2

*** $p < .001$, † $p < .10$

及び調査時期（実施前・実施後）を独立変数、居心地の良さの感覚を従属変数として、反復測定による分散分析を実施した。その結果、調査時期の主効果が有意 ($F(1,59) = 25.66, p < .001, \eta^2 = .75$) であり実施前よりも実施後の平均値の方が高かった。なお交互作用については有意傾向が認められるに止まった ($F(1,59) = 3.29, p = .07, \eta^2 = .03$, 表4)。本結果から、児童のクラスにおける居心地の良さの感覚については、援助行動を含む鬼遊びであるか否かに関わらず、鬼遊びへの参加を通じて高まると考えられた。

なかま鬼では援助及び被援助行動が頻繁に行われることから、クラスにおける居心地の良さについても両独立変数の間に交互作用が認められると予想されたが有意傾向に止まった。実際、なかま鬼の実施前後において居心地の良さは大きく向上した一方で、しっほ取りの実施前後においても同様な変化が認められた。本結果は援助及び被援助行動の頻度による違いというよりも、鬼及び逃げ手という役割が与えられるなかで、同じグループの児童間の関係性が高まったことによって導かれた可能性がある。江村・大久保(2012)は、同じクラスの友人との関係がクラスにおける居心地の良さの感覚に影響することを明らかにしている。従って、鬼及び逃げ手の役割を交代しながら行われる鬼遊びでは、クラスの友人との関係性が強まったことにより、居心地の良さの感覚が肯定的に変容したのではないかと考えられた。

まとめ

本研究では、本学附属坂出小学校及び高松小学校の児童を対象とした実践研究を実施し、児童の援助行動に注目した鬼遊びの体育授業における実践方法を検討すると共に、鬼遊びの効果について検討を行った。

研究1の結果、体育授業における鬼遊びの実践方法及び、効果の実証に向けた調査方法の修正点について情報が得られた。またなかま鬼は一般的な鬼遊びとは異なり、敏捷性に劣る児童

であっても活躍できる特性を備えていることが明らかになった。研究2の結果、援助行動がより促されるなかま鬼に参加することにより、児童の援助自己効力感が高まるほか、クラスにおける居心地の良さの感覚についても向上する可能性が窺われた。

今後は児童の援助行動を促進するメカニズムを明らかにするために、児童の主観的評価に加え、実際の援助・被援助行動の頻度や児童間の交流頻度ほかについて、授業中のビデオ映像をもとに検討していく。

付記

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号：16K01622、研究代表者：上野耕平）の助成を受けて行われました。また本研究は、学部教員と附属学校園教員による共同研究プロジェクト（研究代表者：上野耕平）として実施されました。

引用文献

- 江村早紀・大久保智生(2012) 小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討。発達心理学研究, 23(3):241-251.
- 石塚浩(2006) 発育発達期のプログラム。日本体育協会日本スポーツ少年団編 スポーツリーダー兼スポーツ少年団認定員養成テキスト。日本体育協会日本スポーツ少年団：東京, pp.160-166.
- 文部科学省(2015) 学校体育実技指導資料第7集 体づくり運動—授業の考え方と進め方—改訂版。東洋館出版：東京。
- 永井暁行(2011) 援助行動に関する研究の動向と課題。中央大学大学院研究年報, 40:53-69.
- 大津展子・細越淳二・高橋健夫(2010) 体育授業における社会的な行動の変容に関する検討—スポーツ教育モデルの実践を通して—。スポーツ教育学研究, 29(2):17-32.
- 妹尾香織(2001) 援助行動における援助者の心理的効果。関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究, 55:181-194.
- 杉原隆(2003) 運動指導の心理学—運動学習とモチ

- バージョンからの接近一. 大修館書店：東京.
- 高木修・妹尾香織（2006）援助授与行動と援助要請・受容行動の間の関連性—行動経験が援助者および被援助者に及ぼす内的・心理的影響の研究—. 関西大学社会学部紀要, 38（1）：25-38.
- 友添秀則（2005）体育の存在意義を考える—人間形成の立場から—. 体育科教育, 53（10）：62-65.
- 友添秀則・梅垣明美（2007）体育における人間形成論の課題. 体育科教育学研究, 23（1）：1-10.
- 上野耕平（2016）援助行動を含む鬼遊びへの参加が児童の援助自己効力感に及ぼす影響. 日本体育学会第67回大会予稿集, p.142.
- 上野耕平（2017a）運動あそびにおける援助経験が児童の援助自己効力感に及ぼす影響. 香川大学教育学部研究報告 I, 146：57-65.
- 上野耕平（2017b）援助行動を促進する鬼遊びへの参加が児童の援助自己効力感及び学級適応感に及ぼす影響. 日本スポーツ心理学会第44回大会研究発表抄録集, pp.134-135.
- 梅垣明美・友添秀則（2010）JTPE掲載論文にみる体育における道徳学習と責任学習の研究動向. スポーツ教育学研究, 29（2）：1-16.
- 山極寿一（2015）人にはどうして家族が必要なのでしょう. 考える人, 51：26-53.